論說

泉を求めて

鳥生新生

科學萬能の迷夢が續いた。

近代人の科學による恩惠は深く且つ大きい。

併し、科學は何を吾々に與へたのであらうか。

科學が人類をどれ程幸福にしてくれたであらう。

成る程、世の中が便利になつた。現象界が明瞭になつた。そして其以上の何であつたらう。

此の廣大無邊の宇宙に面し、此の神秘不可思議の靈界に對して、科學者の知識は實に九牛の一毛にも過ぎないであらう。然るに唯物論者、似而非科學者は不遜にも萬物皆己が掌中にあるかに考へて、靈を否定し、神を笑ふは誠にこの尊嚴な宇宙に對する冒瀆であり、宇宙意志への反逆である。

學者は偉くなればなるほど如何に自分が無知であるかを悟るといふ。

然るにどうであらう。

宗教は迷信だ。

正夢は偶然の一致だ。

と放言するものがあまりに多い現代ではないか。

探究堂奥に達したものはかゝる獨斷はすまい。

顧みて已の如何に小さきかを知るものはかゝる暴言ははくまい。

深夜一人山路を歩む旅人の頼なさを痛感し、更に又、雄大な山嶺に一人立つた登山者のみすぼらしさを經驗した者は少くはあるまい。

地上一尺の遊動圓木を平氣で歩く人も百尺のビルディングの窓闌に立ち得るものは少いであらう。

ふとすれ違つた人を見かへると、きつとその人もふりかへつてゐる。

幾百里を離れた地にゐる親身のもの〻變事を正しく夢に見たり、或は其と同時刻に胸騒ぎがしたりすることはあまりに多く聞く普通のことである。

夢遊病者がその夢の間に、即ち靈の働きだけによつて自分の肉体を自由自在にあやつることも事實である。千尋の谿谷にかけられた一本の丸木橋でも夢遊病者はすた〳〵とわたるのである。何の躊躇もなしに。併し若しその時誰かゞ聲をかけて、危ない！　とどなつたらばその人は忽ち夢から覺めて墜落するのである。

又正氣でならばどうしても登れさうにない斷崖でも一條の葛を頼りに登り。不斷、温厚ときこえの高い人が殺人をする。この種病的な、併し怖るべき力及び動作は單に大腦と肉体が與へ且つ行爲したのであらうか。

一匹の鼠ですら火事凶事の起る數日前にはちやんと何處かへ逃げてゐるといふことは昔から言はれてゐる。

誠に靈の力は想像以上に強く不思議なものである。

靈の存在を否定する前に、靈的神秘が吾々の周圍に如何に多いかを認めざるを得ないではないか。

この世の生きとし生ける物は皆、より善くならうとしより多く子孫を繁榮させようと全力をあげてゐる。

一人の人間がこの世に生を得たのもやつぱり偶然であらうか。

何もかもが偶然に發生し、自然に生長するのであらうか。其にしてはあまりに秩序正しい世界ではないか。

何故總ての生物はより善く、より多くならうするのであらう、一つの例外もなしに。

此をしも一片の本能論をもつて片附け得るであらうか。

吾々は、其處に何等かの意志、意圖のあることに氣付かねばならん。

唯一つの意志の動く方向に萬物は不斷の躍進を續けてゐるのである。

この意志による無限の運動、進轉がなかつたならば、この宇宙は全くの空である。吾々の世界は虚無である。何となれば物体を極限まで分折すれば分子に到る。分子は原子に、原子は更に電子にまで分たれるのである。今その電子の構造を見るに、陽電子即ち核といふものがあつて、その周圍を幾つかの陰電子が廻轉してゐる。それは恰も太陽のまはりを地球や水星等の惑星が廻轉してゐるのと同じである。今もしこの陰電子の廻轉が止まればどうであらう、原子は忽然としてその影を失ひ空に歸するのである。原子がなければ勿論分子も、亦あらゆる物体は皆虚無に歸すること勿論である。

されば吾々の眼に見、耳に聞き手に觸れる森羅萬象は實にこの電子の廻轉によつてのみ存在し得る。

電子の廻轉非廻轉は實に吾々の生命をさへも支配してゐるのである。

もしこの重要な運轉が思ひ思ひに行はれたならばどうであらう、想ふても戦慄せざるを得ないではないか。

さればこの電子運行の秩序正しさは、何等かの至大の意志によつてなされてゐるのではないか。

然り、實に神の意志に從つてゐるのである。

神は宇宙を支配してゐる。

神は靈の父である。

肉体は靈の假の宿りである。
科學を信頼するなといふのではない。
科學は生活の枝葉的手段である。
然るに、宗教は生活其自身である。目的自体である。宗教が一片の迷信でないこと論をまたない。
唯一人なる神に祈る時に吾々は幸福である。
併し科學の進歩が人間の幸福にどれ程の關係があつたであらう。
現代は數理、法則のみの時代ではない。
靈の存在を忘れようとした暗黑時代である。
靈魂の飢え渴き泉を求めて喘いでゐる時である。
科學萬能の迷夢があまりに長く續いた。
併しその夢の覺める時が來た。

新しく生きんが爲に

北村彌一郎

一九二七、十、十五

有らん限りの力を以て働いて休息した時どんな感じがするか。若し爽かな氣分が起らなかつたら、又今までの身の疲れを忘れられなかつたら、未だまだ働きの足らぬ證據だ。心の底から泣くまで働け、血を吐くまで働け。働けば働けるもの、如何なる事でも成就する。而して一度泣くまで働きそのつらさを忘れずに働けば何時如何なる處でも思ふ事は着々と成就するものだ。併し此處に今一つ考へなければならぬ事がある。それは新しく生きる事だ。奴隷となつて働き通したとて其處に二つの道があ

る。即ち積極的と消極的である。若し奴隷に使役されたとて積極的に働く人ならば、其の人はやがて使役者を打ち倒して自ら奴隷開放を行ひ、而も今までよりも一段と力ある働きを爲すであらう。

若い人々よもつと自然を見よ、限ない惠が含まれてゐる此の自然を。そして新しく生きよ。全世界を豫言して廻るやうな者になれ。

今日の文學に浸つてゐるやうな者は碌なものじやない。みんな胃病と神經衰弱と都會病と貧乏症の吐き出しではないか。森林、原野、大海、山岳、此の自然には美に驚嘆すべきものが、人間の靈魂をさへ引張つて行くものが充滿してゐる。此の美を味はずして今日の文學に浸つてゐるのは碌なことでない。菊池の小說は滅亡小說で、武者の小說には自然がなく出て來る人間はみんは同じものだけである。こんなものを文學と思つてゐるととんでもない事になる。それよりか夢を愛し、空想を愛した方が遙かに眞理と美とを呼び出すてだてとなる。

若い人々よ、人間は須く野生でなくてはならぬ。生命は自然と共に存在してゐる。最も生氣あるものは最も自然を發揮したものなのだ。四邊が物淋しければ淋しい程昂奮する精神と、他人に屈伏しないばかりか人を新にする能力とを持ち、不斷に前進し勞して毫を休まず、飢えて無限の生命を求むる人間でありたい。大海か砂漠か荒野か山岳か、何れも新鮮な物質が埋れてゐて野生の人々の來るやその生命を包む。

旅行家のバートンが砂漠に就てかういふてゐる。

「砂漠に立てば、汝の道德心は發展する。更に汝の心の心は快活、信實、懇懃、單純になる。砂漠では酒がいやになる。砂漠では、只一匹の動物の在在にも鋭い歡喜が認められる」。

奴隷としてこき使はれた人間も、一度自然の惠に浸つては矢も盾もたまらず唯自由にのみ生きようとする斯くするからして亦奴隷とならねばならぬ。奴隷的勞働より自然を見出せたなら、其處で一つ研究しなくては、そして反對に「我を見よ」とばかり働くことだ。夏の日中で人が晝寢をしてゐるやうな時に血眼になつて働いて見るがよい。實によく仕事が捗るものだ。併

し働きの一てん張りで通しては必ず破目が出來る。適當な時に休息をして新鮮な空氣と、清新な日光とを身体一ぱい吸ひ取つて自然の有難さをつくづく感じてから、再び勞働に移ることだ。廣々とした森林を今日は之れだけ明日は之れだけと開拓して、黑々とした土が日一日と廣がつて行く愉快さ。其處に夢が現れ、空想が起り、やがて土のついた根を紙の上に移し植える詩が產れて來る。

若い人々よ、何事も自動的に爲せ。自然に親しまうと思ふなら自ら立つて自然に觸れることだ。受動的でして何が出來ようか。受動的の苦しさから脫して、自動的の快味を得よ。

野生は善に近し。人間は新しく產きることだ。それに如くものは無い。

告白

新しい力を得んがために、私は此の約一ヶ月の夏季休暇を、これまで貯へておいた全ての舊い力を出して手あたり次第何でもこつ〳〵研究してゐた。その結果つまらぬものを私は身につけてしまつた。それは睡眠不足である。一方力がついたと思ふものは何一つない。暗に蠢く蟲のやうにそこらあたりをさぐつてゐたに過ぎなかつた。併しそれがために人といふものを可成り明日に知つたやうに思ふ。

侏儒はどんな話をしてゐるか知らないが、私はあの大樹の蔭を思ふては彼等の生活を詩のやうなものと考へるやうになつた。暑熱燒くが如き印度、獰猛な野獸のさまよひ小さな生物はうごめく。その他に、土人はしはくちやの汚れた服をぬぎすて、淀んだ水に身を浸し合掌して佛を信仰す。私は唯それだけで彼等の公明正大な生活がわかると思ふやうになつた。

人は私を笑ふかもしれないが私はどうしても自分の考へを笑ひ流す、すなはち棄てゝしまふことは出來ない。新しい力を得たとは少しも思へない私が休暇の最後の日から、かう考へるやうになつたのが新しい力を得たのでないのかと思ひ始めた。もつとも私は之の休暇中飯さへ十分食べさせられぬやうな苦しみに屢々會ひ、やつとそれを平氣に思ふやうになつた今日此頃であるから、彼等土人の野生で純朴な生活がうらやましくてならず、遂に人間といふものを知つたといふやうなみち條も立てればぶ立てられるのだが。

扨て一つ言ひたい事がある。これは私が經驗した事だが、或人に隨分いぢめられて內心癪にさわつてならぬので私も覺悟するところがあつて、ひどく私を怒つた時、有らうことか私は鰐口を開き腹をかゝへて笑つたものだから、その人はしばし啞然としてゐた。その晩私は日記にこんな事を書いた。

「自分は今日行きつまつてどうすることも出來ぬので變り者になつてみたらすつかり自分の道が開かつた。」

一寸これに就て思ひ出したから或雜誌を開いてみたらエマソンがこんなうまいことを言つてゐた。

「心靈の進步の率は直線的ではなく、漸進的でもなく變形變態の向上によつて現はれる。」

「眞理は變形的形式によつて現はれるが規定的形式では現はれない。」と

つまり阿諛と妥協と皮肉位で躍進の道があくと思つたら一生を棒にふらねばならないといふのだ。

つまらぬ事のやうに思はれて、さてそれを爲したがために好結果を得ることは屢々ある。さう考へると眞理は何處に含まれてゐるか實に不思議である。が、やらうと思ふ事はやるべしだ。必ず何かは得るところがあると私は信ずる。

ベートベンは、自分の骨を嚙み、そしてしやぶり、空に投げあげ、地に埋め、そしてまた掘り出してそれを嚙み且つしやぶる獅子のやうな人間だつたとカーペンターは言つてゐるが、斯くの如き彼の心靈なればこそ、近代文明の背後に神秘がかなでられたのである。

支那民族

圓城佳逸

中華民國と其の支那民族の將來はどうなる？　これが斷案を下すことは決して容易ではない。殊に近年の支那民族特有のもので、三千年來の歴史がこれを證明してゐる習の國民の如くなつて來た。もつともこの内乱といふ惡い癖は支那民族特有のもので、三千年來の歴史がこれを證明してゐる如く、恐らく、いつの年代にも眞の平和はあり得なかつたらしい。だから、商賣としての戰爭が絶え間もなく演ぜられ、從つて昔から帝王を業とするといふ言葉さへあつて、今も尙この殘酷な職業が流行してゐるのである。黄河と揚子江との流域である支那本部の大平原には、古來幾多の民族が流れ込んで、そこに幾多の異つた傳統が植つけられ、幾多の王朝が先住の主權者を倒しては新たな權力を建立したのである。それが爲に民族性の破壞は屢〻行はれたのである。多くは北方から、時に南方から夷狄が侵入して中國の主權を奪ひ取つたので、その度に雜婚も行はれ、民族精神も幾度か激變を生したのであつた。たゞ、あの茫洋たる大陸的光景のうちに流れ込んで來る新入種族は、氣候、地勢、風土の影響を受けて次から次へといつの間にか同化され、遂に今日の漢族となつてしまつた。こんな土地は歴史的の風習として帝王業者の仕事場にはあつらへ向きである。若しこんな潑溂たる刺戟がなかつたら、彼等はなほのこと刺戟の缺乏を感じたかも知れない。

兎に角、國内は常に乱れながらも、昔からこれ程永く存續してゐる國家は一つもない。この特性は將來に於ても同樣であらうと思ふ。しかして現今、世界の文明國は、この彩大な國土の富源に對して、利權獲得に血眼になつてゐる。それが爲主權が侵害されない迄も、樣々な干渉が起り續けてゐる。僅かに外邦から多勢の寄合ひで支へてゐる樣なものである。即ちその利權競爭の相互の自衛上、この國土を保全せねば均衡がとれないといふ始末にまで及んでゐるので國家主權の存在は何處にあるか疑はしいまでになつてゐる。然しこんな厄介な狀態にありながら、民族の自主獨立の精神が拔けないのみか益々擡頭しつゝあるは、歐洲戰後に起つた時代精神の影響と彼等の自覺に基くものである。今日の外國關係が出來る以前から、この國の民衆は、歴史的に自衛第一といふ觀念を深く植つけられてしまつたのである。從つて貪慾嗇もやむを得ない。賭博を樂むも愛錢の念から來てゐる。金儲の爲にはどんな賤業も厭はない。根氣は極めて強い。屈辱を忍んでも商賣はうまくやつて行く。實益の前には國結力も甚だ強い。要するに東洋のユダヤ人である。だから、民族としては恐ろしく強いが、國民としては極めて頼りない。

だから利益を逐うて海に發外展するもの實に一千萬人を越えてゐるが、到る所、彼等はよく忍耐勤勉で、幾分は賣しめられつゝも偉大なる實勢力と位置を確立してゐるのである。

だが、その本國の形勢を見ると實に危機に瀕してゐる。その直接原因は内乱の續發と、極端な財政難である。

何と言つても此の國は五十年以前から今日迄引續いての大輸入超過國であるから、他のこれを償ふべき別途收入のないこの國は全世界に無い不利益な國際經濟に立つてゐると言はねばならない。だからこれが補充の必要上、借金も殖え、利權を獲得せられる。だが、もう身動き出來ぬ樣になつて來た。現に關稅會議は各文明國が寄り集つて、支那の財政難をどうしようかといふ。解決策の一つであると自分は聞かされてゐる。

現今の支那は支那國民の支那ではなくして、世界列强殊に英、米、日、佛四國の支那である。それに又々ロシアが加つて來た。かくて共同利益圈内の支那である。

だが併し私は支那の前途は必ずしも暗くは見ないものである。

（完）

學生の氣風

宗宮復一

「自由、平等」この言葉が現代學生の大部分を左右する思想であらう。學生社會のみならず他の社會にも吹きまくる。あだか

も奔流に浮ぶ芥の如く。

然らば自由〳〵と叫ぶ輩に於て眞に其の本意を解してゐる者の少きを嘆せずには居られぬ。平等とても亦然り。

自由は我等青年にとつて絶對に必要であり又人間として此の世に生を受けた以上等しく神から惠まれた特權である。見よ、世界は日に月に文化の理想に向つて驀進しつゝあるを。これ宇宙の大自由あればなり。各一人々々に特有の自由を有するからだ。其の自由たるや、常に規律ある國家、秩序ある社會の一人として自由を求めねばならぬ事は言を待たない。併し眞に自由の本意を悟らずして自由運動をせば、世の謀反者として又又は校則の異端者として悲哀の憂目を見なければならぬ。今や學生の氣風は過てる自由を崇拜して、それを眞の自由の如く考へてゐるのである。斯くの如き學生を容れる學校は危險極まりない。斯くの如き青年を養ふ社會こそ否國家こそ一大危險と云はねばならぬ。

昔は七尺退つて師の影を踏まなかつた。何ぞ師の人格偉大にして、學生の從順、謙遜なりし事よ。

今や其の影をだに、留め得ぬ感あり。噫！　憂ふべき事哉。「國家を見んと欲せば先づ其の青年を見よ」と。ビスマークが言つたではないか。誠に國家の盛衰存亡は青年にあるのだ。正しく我等の双肩に掛つてゐるではないか。何ぞ低級なる思想に雷同し、盲從するもの〻多き事や。又意志の薄弱なるを嘆せずには居られない。今に及んで自覺、自重せずんば、國家多端の今日に於て、どうして世界に覇をとなふる事が出來ようか。感ずるまゝに一言此所に述べて校友會雜誌に載せる。

二十世紀

工業が目覺しい許りに進歩發展を遂げた。つまり人間が工業なるものを征服したのだ。

機械が今まで被征服の恥辱をこらへて來たが到々こらへきれなくなつた。さうして人間を食つて其の仕返しをするのだ。それが抑々二十世紀に起るべき一大事件である。勞働者は餘程要心せぬと機械の餌になるぞ。否資本家が一段の警戒を必要とする。

人間味

山岸巖

何をか人間味と云ふ、曰く忠恕の心なり、人過失あり、其過を攻めて其人を咎めざるは人間味なり、親の子を叱れども心に子の行末を氣遣ふの眞を藏するを見るべし。

此人間味ありて人其誠に服す、人の過を攻め、其人を咎め、其人を憎むに至つて曾一抹の人間味あらんや。其言理ありと雖も人は必ず服せざるなり。

何をか人間味と云ふ、曰く利害を超越するの心なり。己れの利害に依つてのみ動く者あらば、人も利害によつてのみ其人と結ぶべし。一身の利害の前には何物をも犧牲にして顧みざる人、其の何處に人間味を見出し得べき、如何に悧巧に立廻るとも終生孤立無援に歸せずんばあるべからず。寂々焉として人界を脱するに當り、千萬悔悟するも終に及ばず、人其殘骸に唾して其不德を傳へんのみ。

何をか人間味と云ふ、曰く自省の心なり。人の不善を見て自ら誡むる所あり、人の善行を見て自ら勵む所あらんか。人間味自ら至らん、彼の才に任せて得々として振舞ひ非違を行ふて悟らず。徒らに他人の過誤を咎むるに急なる者に至つては、其可なる所以を知らず、吾身をつねりて人の痛さを知るべきなり、因果はめぐる小車の如し。

何をか人間味と云ふ、汝の敵を愛せよ、穿ち得て玄妙なり、汝の子を愛するの心を擴充すれば足る。人を愛すれば人も亦汝を愛すべし。靄々の和氣と、寂々の孤立と、衆堂を集むると、鼻つまみせらるると、そは各人の心にあり。利害によつてのみ動く者よ、己のみを愛するは眞に己を愛するの途にあらず、己を空しうして人を愛するは己を愛する最大の途にして、同時に人間の執るべき道なりと悟れ。

何をか人間味と云ふ、浴衣かけの交際の出來る心なり、何時も袴を付けては窮屈にて畏縮する恐あり、赤裸々に、つけ飾り無き所にて交際が出來ざる人に人間味は求められず、禮の用は和を尊しとなす、根蔕に和を抱かざるの禮は即ち虛禮なり。形式のみを尊ぶ者よ、生れしまゝの裸子となれ、而して有難き人間味の信者となれ。汝の足らざるを足らずとするに躊躇すること勿れ。足らざるを粉飾するは、自ら其人間味を傷け、其德望を失ふものと知るべし。

（六月）

幸福

原友太郎

古人「人心の同じからざる事其面の如し。」といへり。然れども獨り心のみならず、心の目標たる人の目的も同樣である。例へば、僅々東京・大阪間の汽車の乘合客に於ても、或は商業用あり、物見遊山あり、官吏の出張親戚故舊の吉凶禍福を見舞ふ者ありて、同一目的の爲に動く人は極めて少ない。尙進んで內容を仔細に調ぶれば、減多に同一目的のものは有り得ない。斯く世人の目的たるや千差萬別にして、一槩に定むる事が出來ない。今少しく問題を代へて、「然らば人々は何の爲に勞役をなすかに對して、金錢・名譽及び良心の滿足を得んが爲なりと云ふべし。即ち人間最終の目的は幸福を得ん爲なりと云ふに歸着して、星を戴いて出で、月を踏んで歸る農夫も、畢竟幸福の生活を送らん爲である。斯く言へば、道學家は「淸廉の苦節正成の忠誠赤穗浪士の義擧は如何。」と云はるゝも計り難い。が之とても說明し得べからざるものではない。人生の幸福と言ふにも、若しニツチエイズムにかぶれた人士の見解の如く、其性慾を滿すのみが幸福にして、其以外は虛榮心の表現なりせば、淸廉の苦節も、正成の忠誠も、赤穗浪士の義擧も何等の意味を成さぬ事となる。斯かる人々は、超凡俗なる良心の働きに依り一般人に見る能はざる、尊き心の滿足を得、最も幸福なる道を擇んだのである。故に世人の日夜齷齪として、勤務努力するも幸福を除いては他に何物もないことゝなるであらう。古より倫理學者及び哲學者の說かるゝ所の、利己主義を以て人類處世の標準とすべしとし、或は愛他主義を以て最良となす。現に我々が生存してゐる、人類社會なるものは多數人の集合により形成されて居りて、今日の幸福は多數人相寄り相もたれつゝ成立するものなれば、利己主義にても愛他主義にても弊害相伴つて、如何にしても人類の共存共營の實を擧ぐるには自他兼愛主義によるべきであると思ふ。然れども只哲學者倫理學者の架空想にして實現は至難であらう。只我々自他の幸福鄕は遠きに求めず、近く簡易に求めてこそ圓滿なるユートピヤは全地球に充滿するであらう。

理想について論ず

江畑啓一郎

人類特徵の優なるものは其の理性あるにあり理性あるが故に理想乃ち生ず、理想は人類の生命なり、活動の源泉なり。是あるが故に個人活き家族榮え國民興り國家起るなり。若し一度び理想を失はんか個人終には枯木死灰たり、いづくんぞ國民國家の隆盛を望むを得んや。實に人類の消長は正に理想と相關連すること此の如し。是に於て予が理想を高唱せんとする所以なり

抑も吾人は理性によりて眞善美の理念を認識し因て以て一つの理想を構成するなり、而して理想は絕對的に完全無缺の觀念なり。人若し理想を得たりとせんか人は自省により直に其缺陷を自覺し不完を慚愧し發憤努力忽ち以て向上の途につき此れを實現せずんば已まざるの意氣を生ずべし、若し能く其理想を實現し得ば理想亦進歩して一層高きに登り遙かに人を招いて其の向上を促すこと舊の如くなるべし、進歩又進歩、かくして理想は永遠にあるなり。

只追ふべく而して及ぶべからず、只登るべく而して窮むべからず、是れ即ち理想の價値ある所以にして又、人類無限の進歩ある所以なり。

人赫々たる理想を得ることなく頑迷なる妄念邪慾のために使役せられ、蠢々として東奔西走するも尙及ばざるが如く然り、今や徒に泣くべき時に非ず、徒に悶ゆべき時に非ず滿腔の精氣を振つて大いに進取努力すべき時なり。人理性を有するに何ぞ

理想を求めて此に向はざる、何ぞ著々歩武を向上の途に進めざる。

記せよ醉生夢死は人生の天職を全する所以にあらざるを。嗟、吾人は精神上の死者たるを恥づ、故に吾人は遠大なる理想に向つて進まざるべからず。

東洋の堤防

岡庭博

五千年來洋々と流れて未だ止まざる江河の水流。或は年々七十間の陸地を增すチグリス・ユーフラテスの流れ、又は千古の雪を頭に頂き屹立するヒマラヤ大山脈是等と共に發達し來れる東洋文明は實に驚くべき物あり。

數千里に渡れる萬里の長城、さては大運河、又周の制度は世界の模範制度と言はれ、一度ジンギスカン起てば殆んどアジアの大部分を從へ領土は遠くヨーロツパに及ぶ古來英雄雲の如く集まれる所は即ち東洋なり。

然るに現狀や如何。かつては東歐西亞に雄飛せるトルコは歐洲大戰後國力頓に衰へたり。中世大食國を建設せるペルシア又昔日の面影なし、安南又佛領となりシヤムは辛じて獨立を保てるのみ。東西交通の要衝に當りし新疆は今砂漠と化せり。隣邦支那は眠れる獅子か將死せる象か、此時に當り東海の列島により獨り四海に雄視するは何れの國ぞ、あゝ大元の襲來を退け得たるは何くの國民か。北は千島、樺太より南は臺灣琉球まで一千二百里に亘れる列島は實に東洋の堤防にも似たり。

利己的なる慾望にもえたる彼等白人種を退け得るは只此の堤防あるのみ。然るに近來青年はややもすれば白人種の物質文明を追はんとす。あゝ危い哉。外に排日の聲高く中に人口の過剩に苦しむ實に恐るべきなり。起て吾人は呼ぶ堤防を守れ。千丈の堤も蟻の一穴よりくづるるを知らずや。黃色人種は立つて白色人種に對抗せざるべからず。

徒に小問題に迷はず大同一致して白人種に對抗せよ。あゝ重任は我等の雙肩にかゝれり。

運動の必要

松宮實

如何に學問や智識があつても、身体が强健でなかつたら役に立たない。そして身体を强健にするには運動に如くものはあるまい。

世の人は往々學問や技藝を磨くのに熱心な餘り、其の業が成功するのは乃ち病人となつて寢る時である事がある。甚だしいのになると學問にも事業にも遊びなまけて食つてばかりゐて、病弱の者となるのがある。是皆運動を忘つたので、自ら招いた禍と云つてもよからう。それ程でなくても運動の必要を知りつゝも或は忙しいのに妨げられ、或は運動に伴ふ苦痛をきらつて、遂になほざりに流れる者が少くないと思ふ。

運動する時は、呼吸器を調へ血液の循環を助け消化の作用を盛にして、身体を健康にする等の効がある。

そればかりではない精神を爽快にし、事に當つて辛抱强く、勢よく進むの勇氣を生じさせる。此の如くにして、始めて自分の爲や世の爲に盡す事が出來るのである。

運動には其の種類が甚だ多い。各種の体操や遊戯等は、老若男女によつて適するのと適しないのとがあるが深呼吸や登山や遠足等は、簡單で體に適當するだけ出來るし。其の上割合に效果のあるものである。

散文

「サイン」の餘暇二題

竹中正

(A) 小さき落葉に

晩秋初冬にかけて、或は檜皮屋根を吹き飛ばし、或は樹木をへし倒しなど、處嫌はず暴威を逞うした野分も、今朝來は何處へやら其の姿を掻き消し、ぼやけた灰色の雲間よりは、うつすら陽光が漏れて來る……さうして、いつもの樣な和かい調和を初冬の寒空に流し込んでゐる。

だが、數日前とは全く見違へる程に變り果てた大自然の姿今靜かにその一角に立つて展望する時、私達は何と云ふ速かな自然の變化を認めることであらう。

樹木と云ふ樹木は、全く見る影も無い迄に虐げられ、もう見るも痛々しい姿を現し、只其の糜爛した如き汚らしい巨幹が、ぶつきら棒に、穹窿を突破つてゐる。

さうした對照は、彼等の野分に對するせめてもの復讐ではなからうかとさへ考へられ、如何にも皮肉に感ぜさせられる靜かに其の巨幹を撫でながら、附近に散らばつた木の葉の一つ一つを見やりつゝ、私は思はず深い嘆息を漏らした。今は「落葉」と云ふ憂名を被つて、殘骸同樣な彼等も、噫、數ヶ月以前には未だ生々しい新綠の青葉だつたのだ。そして、其の頃には暖かい陽炎と戯れつゝ、その短命な一生を更に惜むともなく、すく〳〵と伸び行くが儘に躍動して行つたものだ。

併し、現在の姿、それは何と云ふ凋落の姿、廢頽の姿なのだ。彼等の惠まれない宿命。さう思ふ時、私は餘りにも薄倖な彼等の過去が限りなくいぢらしく思はれてならない。然し神の如き彼等の尊嚴な姿は、自己の宿命を悲しまうともしなければ、呪はうともしないのであらう。彼等は、すべての人間的打算的運命を超脱し、否定するのだらう。只、默々と大地の中に融け込んで行く儘、自然の運行に逆はうともしない

だが、私に取つては、斯んなに迄薄倖な運命の持主をまざ〳〵と見せ付けられては、坐ろに「幻滅の悲哀」が感ぜられる。私は小さい彼等を手にして、靜かに、だが力强く接吻してやりたい樣な氣がする。

「小さき落葉どもよ！　私は悠久にお前達の味方だよ。憐なものを見て同情の涙を流す。それが本當の人間だつたねえ。そして、私は恁う叫びたい。

"I swear I am for you that have ever been maltreated."

さうだ、さうだ。私は飽く迄虐げられたものに涙を流す人間だよ。」

(B) 大空に

晴れ渡つた一日、私達が疲れた頭をそーつと擡げて、靜かに窓越しにみる時、私達の眼前には、あの澄徹した青磁色の大空が廣々と展開されて行きます。

さうした瞬間、私達の心はあの高い〳〵穹窿の彼方に、する〳〵と昇つて行く樣な感じを抱かされます。

私達は、發作的に大空の中に美を認めるのです。それと同時に、大空は亦私達の疲れ切つた頭腦や魂の慰安者となつて吳れます。私達の心は、以前の苦みも疲れも忘れ果てゝ、只無限の大空をみたその瞬間に於て、既に詩に憧れ、繪に憬れ得る本能に驅られて居るんです。

空の美——それは、私達人間に取つて限りない愛着の的、憧憬の的なのです。「人間は誰もが、自然の美を追求する本性を持つ。」恁うした意味に於て、私達が、何時何處に在つても、あの美しい魅する樣な青空を眺めては、總ての邪念・鬱心を棄てゝ、慕進的に、全く詩や繪そのものゝ樣な清淨な魂の所有者となつて、「自然」の中に融け込んで行き度い心持ちを覺えさせられるのは當然の事なのでせう。詩を創作し、繪を塗抹し不朽の名聲を地上に遺す世の天才の幾多は、皆あの清淨無垢の大空に、心からの「美」を求めんとする人達です宏遠に、悠々動かざるあの青空、それは古來下界の人間あらゆる「美」を敎へて吳れきした。

又夜に於ても、さうした空の美を味ふ事は出來ます。銀河の邊り、無數の星輝く夜の空――一つ一つの星どもは一體私達の胸に何を告げんとするか。こゝにも大空の美が忌憚なく窺へませう。それ等は、地上の豆電燈の樣な無趣味なそれ等ではありません。あの遠くきらめく星屑の姿を凝つと見詰めてゐる時、私達は地上の總てを忘れ果てた。そしてあのちら〳〵と踊る星と共に永劫に生きて行きたい欲望を感じて參ります。全く、夜の世界にも亦、恁うした空に對する限りない憧憬の念がひし〳〵と湧き起るのです。

無限の大空よ！　それは何時迄も〳〵私達人間の憧憬の的であり、親切な慰安者であつて欲しい。

私の村

大島善太郎

或る初夏の一日私はぶらりと家を出て裏山の繖山に登つたのであつた。この山は高さは一千尺もあらうか丁度西北にあたる安土山を見通して内湖を見渡すことが出來、西はずつと八幡山、長命寺山を望み天氣の好い日などは多景島、竹生島をも望み得る湖東の湖に近い一つの山なのである。登つて西を見渡すと安土の驛を中心に私の村を見ることが出來るのである。

私の村は或る一部の商家を除いては全部農業に營んで居る特に野菜は米に次いでの産物で何時も車で八日市八幡の町々へ搬び出されるのである。この山から望むと耕地整理が行屆いて青田が氣持のよい程に擴つて日本電力の鐵柱が二つ三つ四つとその間を北東から南西に並んで居る。一方白い細い道が蛇の樣にのたつて居る。自分は氣分の面白くない時はこの山の中腹の藥師堂に參詣旁々四丁の坂路を登つてこの景色を眺めるのである。

その日も私はこの景色を眺めてこの私の村の舊跡を私の頭に浮べたのであつた。先づ私は北の安土山を望んであの三重塔を見ながら繖田右府の偉業を偲び昔の樣を想起するのであつた。あの寂びた城址の石崖、あの淀んだ外濠の水、その水の色を見、その崖石の苔を見る度に盛衰の跡をつく〴〵と考へるのである。亦丁度安土山の下の今畑になつてゐる外濠に沿ふた所に南蠻寺の跡だと稱せられてゐる所がある。今はたゞ小石を積んで石崖を作り、こんな所がと思ふ位になつてゐる。その昔異樣な風をした異國人がこんな所に來たかと想ひ起すのである。ずつと南にこんもりとよく茂つた森がある。それが今縣社になつてゐる佐々木神社で乃木將軍の遠い先祖にあたる昔の佐々木城主が祀つてある。乃木大將が明治年間に參詣されたことがあつて今もその手植松が青々と茂つてゐる。春秋二季に祭があつて競馬などが行はれ小さい時分には友達とよく見に行つたもので、亦乃木大將が參詣されたとき小學校に寄られ生徒を講堂に集めて「國民たるものはよく君に忠に、子たるものは親に孝たるべきものなるぞ、どうか大きくなつて立派な人になつて呉れよ、よくこの白毛頭の老爺のいつたことを忘れず勉强せよゝ。」と訓話をされたとかで小學校の時分に修身の時間によく先生に敎へられたことである。佐々木神社の北に續いて淨嚴院といふ淨土宗の寺があつて信長が日蓮、淨土の兩宗の博識をして互に談義せしめた所である。このお寺は毎年十月にお參りがあつて近隣の村々の人々が稻の色づいたのを樂しみながら參詣して、一日の遊びをするのでその時はいつも一杯で押すな押すなの人である。「ゴーンゴーン」と鳴りひゞく鐘の音を聞いて子供達は「淨嚴院へ參らう」などゝいつて各各小使錢をねだつて見世物小屋の中でやんやと喜び叫んだものである。

村の南の山の中にはどうも古墳らしい樣な所があつて時々人骨が出たことがあるかといふことである。

一方又私の登つてゐるこの繖山は佐々木の城址で今は空しくその址を止めてゐる。たゞ松の綠と空吹く風は松の綠は益々綠に空吹く風は颯颯と吹いてゐるのみである。斯くの如くに歷史に名あると同時にそれに伴つて傳說も數多是を有してゐる。

その一つに古老の傳ふる所によると斯くの如きものがあるそれは丁度天正の頃信長が安土山に城を築き或年のこと家來を連れて繖山に鷹狩りをされて宴を山上に催ほされしその時に日頃信長の寵を受けて居た侍女の茶子といふものが他の侍女達に嫉まれて終に讒せられた。茶子は痛くこのことを恨み悲んで谷に身を投じて死んで行つた。その時に茶子が「自分の斯く人より嫉みを受けるは我が身の顏貌の人に勝れたるによるものである。それ故に自分が死んでも此處より見ゆる地からは必ず美貌の者を出すまい」といつて死んだ。人は憐んでそれよりその谷を「お茶子谷」と言ふに至つたとか。今はその谷は苔むして谷とは名ばかりたゞ清水の流るゝのみであ

る。

自分は斯くの如く歴史的にも傳說的にも私の村に云ひ知れぬ喜びを持つのである。

松

原友太郎

新春壽を祝ひて長松を用ふ。蓋し之我が國古來の風習にして平安朝の期に創まると傳ふ。

其の松は四時翠をたゝへて嚴冬酷暑にも屈せず剛健その物の如き姿態を具へてゐる。只それのみならず、人世に對し、更に深き靈的の秘鑰を有して居る。今若し此の日本より松樹を抽き去りたらんには、植物何の靈味かあらん。何の威嚴かあらん。古今松樹をして美の背景とせるも幾何なるを知らず。曰く彼の艶麗優美なる能樂を作し、我が日本文學代表作の一たる羽衣の曲にも老松數多立竝ぶ三保の松原をとり入れたり丹頂の鶴は松の壽に親みて齡千年を保つ。又高砂も松ありて翁、媼古稀の齡を重ねしならん。浦の波靜かにして、遙か聳ゆる富士の高領も老松の一樹を交へんにその雅味幾層なるか歌人西行も行路の松に離別を惜みたりといふ。若し彼の松にして四時其の緣をたゝへざれば、彼の愛着心も一時的の淺薄るなものなりしならん。或は名所舊跡に於けるも亦然り。日本三景の勝たる名も高き松島も、天の橋立の長棧も、豈かに松の濃き翠千年變らざる山を背にすればこそ。斯く目に美はしく映じ耳に天籟の松風を聽く者誰か塵世に愛着を感ずる者あらんや。

大自然には吾人の身心を淨化し美化する或物(サムシング)あり。松はそのサムシングにして我が國民性に不離の關係を有す。

如何なる小園の一偶にも松の一株を見出し得ざるなし。ましてや廣大なるものに於てをや。松多き地に病なしとかいふむべなるかな、或は傳ふ老松枯死する時樹下一株の若松よく老松を生かしむ。或は眞ならん。

海

林俊雄

海邊の森

虫の音のみがしきりに聞えて月はない。超越的な老松が大地の底から甦り來る過去の亡靈の樣な姿で立つてゐる。森は無想無念寂然不動の八字で滿たされてゐる。

靜かな森、そこには自然の秘密が藏されてゐる。森を愛する人の云ふ。「森の中には憎惡もない、愛慾もない、凡べてのものは自然が與へる恩惠に生き凋落する。彼等は自然のまゝに生き自然のまゝに死ぬ。そこに歡喜はないかも知れぬ。けれども死別を悲しむ慟哭はない、自殺はない、裏切られ傷はられたる寂しみはない。森は永遠に默してゐる。彼は私を拒みもしない。自然は孤獨であること、そして萬有は默しつゝ運命のまゝに生き、死なゝければならぬことを示してゐる悠久の寂寞！それを除いて何があらう」と。森の雰圍氣、その香は物慾に走らず、活淡な幽玄な宇宙の謎を秘めてゐる。

黄昏れ行く野路を渡る晩鐘の如く忙しく、

森の若葉を縫ひ行く微風の如く歡ばしく

眼醒むるさ綠の如く爽かな——

口ずさむその音律は益々謎を深めるやう。唯々自然の靜寂に浸るより外にない。月が出る。月見草が此處にも彼處にも咲き乱れてそれを迎へる。森は靜かに。たゞ砂なむ足の音と鈴虫松虫が唄ふのみ。

松は黑い影をくつきり地に落して永久の沈默に耽つてゐる

夜の海

大海、深夜、波は睡げに私語めく。舟は深い攪乱にまじる怪しい憐光は溺れた人々の魂かとも。

恍たる海をながめるとき一種の感慨にふけらされる。その海はいつも驚異と憧憬と禮とを與へる力を永劫にもつてゐる遠きより吹き來る風、波の音も夜を默ふやう。けれど星が灯されて月を擊した波の上は又格別の趣がある。黑い舟がさゝやかなる音を立てゝ通る。磯に打ち上ぐる波が白く光る。海は永劫に沈默の呼吸を續け月の碎けて光るごとに尊とい寂しさが胸にしむ。「人生をあるが儘に凝視すれば其處に何物か不可抗な力があることがわかる。その力は名づけて神とも眞理とも云へよう」と。さらば自然をあるが儘に凝視すれば何があるか。海の響、怒濤の叫び、この靜寂の中に嚴肅な自然の叫びはそも何を語るのだらうか。

燦然たる輝を放つ人類文明も自然の怒りにさからつては到底對抗し得ない。夜海の沈默寂寞の中にも永久不滅な無量の力が含まれてゐる。森嚴な透徹せる波の響にも「不死」の眞理が含まれてゐる。あゝ神秘な夜の海、その響は濁世に喘ぐ現代人を超越して、悠久に靜かな睡にふけりつゝある。

中學生活の私

幾世紀の前人間が人間の生命を間斷なく刻んで行く時計を造り上げて以來長い間時の惡戯者によつて生れ來た悲喜劇の總ては餘りにも數理的に人間の希望をも豫想をも小さな限定の穀の中に押込めて了つた。

理窟も何もない地球がぐる〳〵と五回だけ隋圓形の美華な彼のトラックを馳せてゐる間に世界に五度の明暗が目まぐるしく交代し五年と云ふ時の堆積が早や私達を校門の外に送り出さねばならない樣な立場にまで延びてしまつた。

總てなつかしい思出に滿ちた中學生活と云ふ鎖から切斷されて更に新しい形式の社會に放逐される事は過去の思出がうれしい幻想の世界であればある程私達には可成痛手に違ひない。「さらば中學よお別れださらば。」私達はそんな事を平氣で云へるだらうか。之も時間の想像した惡戯の一つに違ひない。生者必滅會者定離等と敎へた佛者の言葉が今の私にはたまらなく恨めしい樣な氣がしてならない。

話が終に愚痴になつて笑はれるかも知れないけれども人間と云ふものはほんとうにさうした矛看と撞着の中に住む人間

でしかないのだ。

私は卒業の押しせまつた現在になつて無關心にすんで來た中學生活に對する強い、感謝の念が涌上つて來るのを抑へる事は出來ない樣に思はれ出した。勿論私は五ケ年間に幾分智識的に組立てられたがそんな事は大した問題ではない。唯異樣に緊張した若々しさと力强さの洪水の眞中に心ゆくまゝ息づきながら私と云ふ人間の塑像が美事に創作されたからである。それは私にとつて無上の感激でもありすばらしい奇蹟でもあるのである。

× ×

中學生活は私にとつては丁度修學旅行の樣なものだつた。愉快な出來事と突飛な椿事との交錯した定められた時間だけをゆられ通しに行程を終へた私達の列車は疲れた夢をのせて將に故鄕の構内に飛び込まうとしてゐる。そして誰しもが一樣に面白かつたとしか云ふより他何物をも持ち歸らなかつた樣に私達の五ケ年も矢張面白かつたの一言で盡きるだらう。

然しその面白かつたは五ケ年の体驗生活の全集である。即ち体驗とは自已の魂にくつきりと書き上げられた壁畫の樣なものだ。永久に不滅の追想の泉が其處から涌き上ることだらう。若さと共に失はれ行く純情に新しい熱と力が供給されるのも其の頃の生活からであるに違ひない。

そんな意味に於て私の歩んで來た過去五ケ年の生活の途上に微かではあるが自已の足跡に滿ちてゐることを心强く思つてゐる私は靜かに踏にじられた足跡から芽生え出る草の實の割れるのを待たう。

三角術

中川源作

金持になるには三角術を應用しなければならぬ。義理をかく、人情をかく、耻をかく、これで三かく。

一つの我

朝五時に起きねばならぬと思つて寢ると屹度五時には我を喚び醒す我がある。すると又唾たし睡たし再び眠らんかなといふ我がある。人は何人も此の二つの我に支配される。その何れの我に隨ふかに依つて人の運命は右し左するのである。

不道德滿員

電車の車室に唾を吐く男がある。「それはいけませんね。」と面責すると「誰だつて吐くぢやないか」といふ。それもさうだと思つた、全く誰でも吐く樣だ。不道德が滿員の世の中だから。

二割引處世法

現代人の生活は懸値の生活である。割增の處世法である。商品を市場に提供するにも人物を社會に提供するにも必ず懸値がある。割增がある。割增の標準は大低二割以上である。今の世に品物でも人物でも定價通りの値段を以て買ひ込むものなら必ず二割以上の損失を豫期せねばならぬ。ところが吾輩はその反對に二割引處世法といふのを金科玉條としてゐる三度の食事が二割引腹八合で箸を置く。人と議論してもトコトンまでは追窮しない八分通り追窮する。八分目に中止して殘り二分を研究の餘地として置く。拾圓の萬年筆が欲しいと思つても八圓の品で辛抱して置く。笑ふのも饒舌るのも小言を言ふのも悲觀も樂觀も先づ二割引の控へ目八合八分といふところで切上げる。こゝに妙味がある。これが吾輩の二割引處世法である。

野心家

野心家が居なかつたら世界は死物に違あるまい。

朝未明に床を離れる人、終日勞作して厭はない人、窮して益々勵む人、達して益々進まんとする人、皆是野心家である彼等を除いたら他は悉く寢床の中で哲理の空を考へ林の奥で狸の智慧を讃美する者のみである。「野心」の聲は何だか物凄く、不正の感に打たれる氣味があるけれども自慢が美德の如く野心も決して不正ではない。實に神の附與した才能智識を其儘朽ちさして了ふのが嫌で大いに用んと企てるのが取りも直さず野心家である。どつちかと言へば彼等は神に忠なるものではあるまいか？「戰爭」の聲は「野心」の聲よりまだ殺氣に滿ちて居る。而も戰爭なくては平和の曙光は吾人を見舞てくれぬのだ。野心家が既に人である以上は神の如くに無欲ではない特に彼等は力あり、才あり、大いに爲さんとして千辛萬苦物ともしない人種である。然らば其の欲望も自ら廣大ならざるを得まい。併しどんな一小事を營むにしても只自己一身の利害のみを打算しては成就するものでない。凡人でも此位の道理は明かに知つて居る。まして野心家とも言はるゝ者に此の理の解らぬ筈はないのだ。彼等は常に、「大いに取り大いに與ふ」斯る意志の下に活動して居る。罪の兒の別稱ある人間の事であれば彼等もどんな損害も社會に與へないとも限らない。否損害を與へる事の大なる丈け彼等の公益は大なりと論斷し得る場合が多い。然るに醉生夢死の所謂善人等は自分が社會を益さない代りに害する事もないのを鼻にかけ野心家の損害のみを楯にして彼等を攻擊するのである。野心家を以て盜賊と同一視して居るのは所謂善人の常である。水は洪水ととなつて人畜畠畑を損害する事は屢々である。而も水の有益を否認する者は一人もないだらう。野心家は實に水の類である。珊瑚蟲は自ら安んぜんが爲に其の同類を利用しようと企て居る。而も彼自身他の珊瑚蟲に安居を與へて居るのだ。野心家も珊瑚の類である。

秋の途上

池田文中

朝風、爽かに清き心地よく、颯と袂を拂ひぬ。未だ明け染める、あしたの空、光り寒げに瞬く疎らの星を頂きつ、歩み輕う露繁き細道、小草を踏み敷きて辿り辿れば、微かなりし蟲の音はつと止みぬ。見渡せば一筋野川うねり〳〵て、遠く東に流れて、野末は薄霧の渡せり、汀に折り伏したる枯葦の戰ぎ、何鳥ならん、ちゝと啼きつゝ飛びち立たり。昨日迄黄金の波打ち寄せにし田面の稻は、刈り取られて獨り彳める案山子の姿破れ笠、風にから〳〵と鳴るも淋しや。夜は最早曉けなんとす東の空横雲の一條二條、仄仄と靉き染める頃、そよ風四邊をこめにし薄霧は稍〻晴れぬ。蒼穹は瑠璃の色に澄み渡りて、一片の雲さへ無き明かさよ。さし出づる柔かき朝暾の光りに半ば枯れ萎みたる葉末に宿れる白露は、あゝ此處にも彼處にも眞珠とばかり輝きぬ。橋畔を渡りて見返れば、今來し道の彼方、里の家はやう〳〵起き出でしか、炊事の煙緩かに立ち昇る堤の柳はら〳〵と二葉三葉我が肩に散り掛かる。吹き來るそよ風に山麓の大銀杏樹は、黄金の小扇にも似たる葉を音もなく雨ふらす。今我が袖に散り掛かりし葉二つ三つ色よきを賞でて、遠く東の方、畔を放てば青疊布けるが如き大海原は眼前に展開し、更に西山に首を回らせば眠れるが如き風情、實に一幅の油繪を展べたらん心地がせられて、實に心ゆかしき眺めなり。霞簀張りの茶店の床に、腰うち掛くる老嫗が侑むる澁茶に渴を慰むる樣やゝ少時。夕餉の烟立昇る白き浮雲は、輕う浮べり。西山を彩り染めし暮雲の紅もやう〳〵にして淡れゆき、夜の帷はやゝ垂れそめぬ。疲れし歩みを進むれば、遙に見ゆる茅屋の燈火ちら〳〵と三つ四つ赤し。灰色を流せし黄昏の空には明星の影煌めきて彼の森、此小川、鎭守の社、日頃見馴れしを今更に心嬉々として我は今我が家へと急ぎぬ。菊の香薫る小庭を廻りて冷かなる寛の水を掬べば、清水に宿れる月はゆら〳〵と碎けぬ。口づから月光を吸うて我は快感に打たれつ窓の戸推して光冷かなる月影斜めにさし入る下に坐して詩篇を繙けば、庭の露にすだく蟲の音細し。おゝ涼しき秋風、瓶に挿める黄菊の一本、床しき薫り袖の邊りに漂うなり。嗚呼我が秋の一日の樂しかりしよ。

あらし

山口彌平

星の影もいやに澄んだ秋の靜かな夜更け、私は早く取つた床よりもぐり出て、机の傍の椅子にグンナリと自分の身をもたせた。私の心は近頃何だか絶望的な感情で滿たされてゐたそして一寸した事にも自分の心は無闇に淋しく、悲しくなるのであつた。

今迄のうつら寐の間に惡夢に襲はれてゐた私の眷中は、ビツショリと汗ばんでゐた。そして今なほ私の目前にはあの恐ろしい幻影が渦を卷きつゝ乱舞を續けてゐるのであつた。あの直線的な眞黑の惡魔は、今にも私に飛びかゝつて來る樣だつた。私を大きな喘息をついて靜かに眼をつむつた。

暫くして私は机の前に立てかけてあつた手鏡を手さぐりして取上げた。

秋の長夜を鳴き明かすこほろぎの聲が緣の下より丁度秋の悲哀を訴へてゐる樣に聞えて來る。よし障子の影に一夜の宿を得て、スイツ〳〵と絹を裂く樣な音を立てゝ鳴くあの靑い蟲の聲にも、今宵の私は涙をそゝられる樣なつらい思ひがするのであつた。私の部屋の近くまでその茂つた枝を持ちかけてゐる靑桐が、風もないのにサアツとゆれると、私の耳には身震ひする樣な云ひ知れない恐怖を與へるのだつた。其頃の私はそれ程神經過敏になつてゐた。

電燈のスイツチをひねるとカチツと云ふ音と同時に、私の部屋には薄暗い光が流れた。私は手にした鏡を自分の頰にすり寄せた。其瞬間私にはキヤツとでも云ひ度い樣な薄氣味惡い冷やかさが全身にみなぎつた。私は鏡持つ手も震はせながら、無理に私は活動寫眞の俳優のする樣な表情をして見た。そして暫し私は自分の顏に眺め入つた。そして自分の面に薄氣味惡い苦笑のもれてゐるのを見出した時、私は發作的にアツと驚きの聲を發してしまつた。其の時の私の顏は餘りに氣味惡く恐ろしかつたから。平常なら此の殺風景な自分の顏には、幾分かの愛嬌を添へてくれる齒並が、今夜に限つてかうも恐ろしき惡魔の牙の如く見ゆるとは！

自分は手にした鏡を机の上に投げやるなり急に顏をおほつてしまつた。眼じりににじんでゐた涙が丁度ヌル〳〵した油の樣にねつとりと私の手に感じた。其瞬間私には不思議な感動が襲つて來た。私の周圍のものを總べて急速力で廻轉し初めた。そして私の体がその中心點になつた時、私の目前は全くの暗黑一界となつた。私は萬尋の谷底に足ふみはずして、屹立せる巖石の間や直立せる絶壁の間を全速力で沈み行くが如く、又果しなく續く砂漠の中に私の魂ははかなき一點の影を殘して去り行くが如く。私と云ふものゝ總べてがあらゆるものから、遠く去り果てゝしまふ樣なはかない心持になつてしまつた。終に意識がボーツとしてしまつた時、私はバツタリと自分の身を机の上に伏してしまつた。其後私にどんな感情が續いたものか、それから私がどうなつたのか、私は少しも意識してゐない。

こんな時間が幾分か過ぎて、私は何事もなし氣に靜かに頭を上げる事が出來た。私は重苦しい心持で、大きな欠伸をして兩手で力の限り自分の胸を抱きしめた。私にはどうしてこんなもどかしい日が續くのかしらん。私は又もや鏡を取り上げた。眉毛と眼の間が暫く痙攣した。私の頰の肉は近頃目立つてうすくなつた。それに反して頰骨を眼立つて隆起して來た。眼の肉も落ちた。そして物凄く輝やいてゐる。私はそれをどうして見のがす事が出來よう。近頃の私は私自身を解する事も出來ず、又私と云ふものゝ過去も、そして現在も知る事は出來ないのだ。唯總べてが夢の樣なものだつた。私は急に椅子を離れた。私は隣の部屋の岡田さんの足へ足を運んだ唐紙のすき間よりほのかな明がもれてゐる。私は輕くノツクした。そして小聲で呼んで見た。

「岡田さん。　もうお休み？。」

「いやまだゞよ。　おは入り。」

やはりお休みぢやないんだ。もうずい分遲いんだらうに。

私は唐紙を明けるなり部屋の中に飛び込んだ。

「まだ御勉强？。」

「いや、もうしまつたんだよ。それにしても君又起きてきたんかね？。」

「えゝ。あのね岡田さん。僕變な事を考へたの。」

「變な事つて一体何だね。」

「何て別に何でもないんだが。僕あなたに御願ひがあるの聞いて頂かれるかしらん？。」

「御願ひだつて？　僕にか？。」

「えゝ。あのね。あのね。岡田さん。ハ……。」

私は突然岡田さんの傍に進み寄つた。そして岡田さんの机の上にあつた新聞紙を手にするなりビーツと引裂いてしまつた。四つに。八つに。十六に……。そして遂に無數の紙片にしてしまつた時、私は岡田さんを見上げた。岡田さんは異樣な眼つきで私の一擧一動も見落さじと非常な緊張をしてゐられるのを見て變る面白くなつて、其の引裂いた紙片をクル〳〵と無雜作に丸めて口の中にほり込むなり無闇矢鱈とかみしめた。

「岡田さん。僕は狂つたんだよ。」

岡田さんは苦い笑を浮べられた。私は岡田さんの襟元をつ

かんでグン〳〵引張つた。それは餘りに感情的とは云ふものゝ私は岡田さんに對して全く禮儀を忘れてゐた。然し私は決してそれを止さうとはしなかつた。私はそれに對して何の恥かしさも感じなかつたから。

「岡田さん。あのね。僕ね……。」

「何だね君は。うるさいつ。」

私は強い方で後の壁にドカンとつき當つた。

「エーツ。何をなさるの。あなたは。」

私は岡田さんに物凄い一瞋を送つた。四つの視線はピツタリと合致した。無言。沈默は續いた。然し私は岡田さんから視線を離さうとはしなかつた。

暫くして体の重みに耐へかねた私は、ズル〳〵と疊の上に腰を下してしまつた。私は岡田さんに薄氣味惡い笑を殘してグンナリと伏してしまつた。

暫く過つて短い夢からさめた時、私はやはり元の儘でそこにうつ伏してゐる私を見出した。岡田さんは私の傍につゝ立つてじつと私を見下して居られる。其面には苦痛と、悲哀と心配が色こく畫かれてあつた。

「Yさん。許しておくれよ。惡かつたね。」

「……」

私は何とも答へる事出が來なかつた。私は無闇に悲しくなつて私の瞳には幾滴かの涙がうるんでゐた。

外は何時しか嵐となつて、激しい雨はザーツと障子を打つ風は荒れ狂つて、楓の枝は惡魔の手の如く、ザラツと障子をさらつては、又引き込めてしまふ。電光に交つてとゞろくすさまじい雷の音。綠の下のこほろぎの聲もハタと止んでしまつた。

「岡田さん。僕どうしたんかしらん。」

國語を愛せよ

中田　實

「失禮ですが……あなたはどちらからお出でなさいましたか。」と或一人が汽車の中で隣の人に話しかける。「ハア私ですか……。（相手の顏をジツと見て。）近江ですがあなたは？。」と全く一面識もない二人が話をはじめる。

「いや申しおくれました……。（サモ嬉し相にしながら）私も同じく近江です。マアよい道づれが出來ました。サツキからお言葉を窺つて居りますとどうも近江訛の樣でしたので實はつい失禮を顧ずお尋ね申しました樣た譯で……ハアハア」。

「さうでしたか實は私も一人旅なので……。よろしく、いやどうもこの邊はよい景色ですなア」。と、こんな風に、同鄕の人と云ふ丈で親しくなつてしまふ。

此が滋賀縣京都府の間ぐらいでは左程にもないが、九州とか又北海道臺灣となると一層親しみがまして來る。それがもう一層廣くなつて外國になると日本人と云ふ丈で、もう嬉しくなつてしまふ。而し同じ日本人でも日本語を話せないとなると何の親しみも起らないに違ひない。何と云つても人を團結するものは血統でもなく土地でもなくて同じ言葉である。國民精神は此の國語から出來て居る。從つて國語がどんなに一國に重大な關係を有して居るかがわかる。國語が其國民に重んぜられるか否か注意を拂つて居るか否かが其國の勢力を左右する。

飜つて我日本の國語を顧るに、甚だ國民に輕ぜられては居ないか？。成る程缺點もあらう。而し自國語を改良せずして徒らに外國語の使用に骨折つて居る人がありはしないか？。自分は四年の間殆ど國語の勉强をしなかつた。怠つたのたとも言へるが、一つは六ケ敷しい英語に一週の半分を費さねばならなかつたからだとも云へる。

そしてさへ未だ英語は良い點が取れぬ。

「學校を出ても薩張英語は間にあはん」と兄も言つて居る。何の爲に習つたのか其の意義が解らないと云ふ有樣だ。

その代り國語の力のない事は驚く、中學四年にもなつて手紙一つ綠に書けない。もつと骨折つておけばよかつたと今更ながら思て居る。僕一人ぢやあるまい、級友の誰かれも英語の時間さへなかつたら……。と云ふのをよく聞いたから、皆が同じ考を有して居るに相違ない。

中等學校を出てさへ自分の考をも言ひ表せない。これが日本の現狀だらうか？　果してさうなら憂ふべき事だ。國語を愛する事が直ちに國家を愛する事だ。それだのに缺點が多い貧弱だと云て、國語を顧ないのはある可き事でない。國語を愛せない者は亡國の民だ。改良して改良して常に怠らないのでなければならない筈なのに、若し全國の中等學生がこんな風に教育せられて居るとしたら不遠日本は危い。僕は日本に國語研究會と云ふ樣な物を造つて、國語を改良し國民に正確

な國語を敎へると同時に、國語を愛す可く鼓吹する樣にしては吳れまいかと待つて居る。漸く頭をあげた國語尊重論を一日も早く民衆化する樣にして吳れるのを待つて居るのである

（終）

寫生に行くまで

曾我繁三

夏休みも間もない或日の事だつた。

丁度從弟の家に寄寓して居た私は生溫い空氣で滿された家にゐるのが嫌になつて來た。實際晴れ〳〵とした好天氣に薄暗い部屋で文學全集を耽讀する氣もしなかつた。寧ろ鐵をも溶融する樣な太陽の下で眞黑になりながら自由に大自然しを友と森羅萬象と話したかつたのだ。

それは午後の事である。今將に現實より幻に引き入れられ樣としてゐる從弟を彼の尊い日課の晝寢より呼び起した時、名殘惜しさうな大欠伸をしながら、ぼんやりした眼で、丁度狐に憑かれた樣な顏付で僕の顏を見睜めて居る。「何？」と問ひながら胃の中まで見えすく樣な大欠伸を又一つした。「未だ寢むいのかい」と僕は問ふ。「いゝや」と氣のない返事をする。まだ矢張り幻の世界を左迷ふ事を憧憬してゐるらしい。僕まで寢む度くなる、勇を鼓して、「何うだ寫生に行かう、それ共水泳に行かうか」と僕は問ふ、寫生に行かうの聲は馬鹿に大きくて自分も驚いた程だつた。從弟は僕の聲に共鳴したのか「呱」と云つて二階へ上つて行く、多分用具持參のためだらう。早速僕も繪筆——繪具の香りの未だ微かに殘つて居る——筆と繪具と其他の用具を持つて表に飛び出した。從弟の來るのを心待ちに待ちながら……。案の定彼は畫板を下げて、買つて間もない繪具（彼は今中學一年の腕白小僧で本年初めて本校の門をくゞつたものだから）を持つてやつて來た。僕はやつと安堵の念をしながら彼と共に或る湖邊に出た葦は一面に此の入江を取りかこんで居て所々に點々とダツシュの樣な小舟か靜かな漣を腹に浴びながら夢の樣に浮かんでゐる……突然從弟の呼び聲に冥想の旅路が破られてしまつたそして寫生に來たものだ！　と云ふ事を自覺しに自分を兩手に用具をしつかりと持つて居る自分を見出した。「お！」返事をしながら、いつの間にか僕をはなれて早や一心に書き初めて居る彼の處へ馳せて行つた。

太陽は相變らず宇宙の道を歩みながら和らかな光を一心に畫き續けて居る若い畫家の全身に投げ掛けてゐた。

それは或日の午後の事だつた。

夏休みも間もない或日の事だつた。

火事

種村儀平

人の喚く聲、夢の中に聞ゆ。忽ちにして、近き寺の鐘、枕元に轟き來りしは火事にや。

すはと躍り起き、戸を打ち開きて、四方を見廻はすに異狀なし。近くに有らずさては對岸の火事——。との安心も束の間、髮振り亂し素足にて走り來る女、聲もおろゝに、「彼處よ」と指しつ、一目散にぞ失せにける。果然火見梯子より警鐘亂打せられぬ。走りて彼の指したる方に至れば、彼處に當りて、人の罵る聲かまびすし。

黑煙濛々と立上りて天を掩ふ。人、右往左往するあり。物音次第におびたゞしくなりて、焰天を燒かんばかりに火勢益繁し。火勢旺となれば人の叫ぶ甚しく、ポンプ宙を走りて掛聲起れば、幾條もの水亂れ飛ぶ。柱の倒れたるにや火粉著しく飛散す。時に叫喚耳に徹す。

此中に有りて家族の避難せるあり。親なるに子供すがりて泣く樣、裸にて逃げ惑ひし樣、等等いとあはれなり。近寄りて、なだめすかす人あり。

かくて愈々火、旺盛ならんと思はれしが、佛神擁護の眸をや廻らされけん。雨さへ降り初めぬ。

火勢頓に衰へて、夜明くると共に、類燒もせで鎭まりぬ。是固より消防手の働與りてぞ力ありし。

火の神に踏みにじられたる我家を、眺めし彼等の心中如何多大の寶を烏有に歸せしめたりしとは想はざりしか。數多の人に迷惑をかけたりしとは思はざりしか。必ず後悔の念に打たれしならん。

夏

吉田穰

平和な眠りより目を醒まして、ふと……外を見れば梢に見ゆる朝風の涼しき庭の景色に誘はれて外に出た。東を見れ

ぼ眞紅な朝日は將に山上に笑顔を見せんとして居る。景色は水彩畫の如く、彼方に見ゆる田舍道を農夫が心地よく行く。家に歸つた僕は父の命を受け、我が田へと足を進ませた。涼風そよ吹く小路を潔よく走る。やがて田に着いた。もう大分伸切つた惠を見せた稻はタツプリ水氣を帶びて健に呼吸を續けて居る。すぐ足元の溝は音をも立てず靜かに澄切つた水を流してゐる、時々は小さな草藻もまじつて流れる。

水のタツプリあるのを見た僕は一層早く我が家に足を運んだ。

やがて太陽も靜かに……靜かに空に昇つた。

×

水色した大空に納つた巨大な火玉の樣な太陽は、鐵も溶けさうな灼熱を下界へあびせかけて居る。風氣一つない正午、庭の木々の葉はぐつたりと頭を垂れてゐる。丁度生氣と、動とを地上から取り去つた樣な世界だ。臺所に寢轉び乍ら只無心に、ギラ〳〵光る土砂を見つめて居ると、一層蒸し暑い樣な感がする。

向ひの家の上空に白い雲二片動かうともせずぢつとして居る。前ぶれで有るかの樣にトンボが馳け去つた。……と、すぐ後から歩き疲れたのか軒下で何處の犬か長々と身体を横へ眠り始めた。

何處から飛んで來た？　銀色した、大きな蠅一匹犬の背の上で盛んに活動を始めた。耳に障るのが五月蠅のか時々ビク〳〵動かして居たが、耐へ切れ無くなつたとみえ、やがてのそり立上つて四足を延ばして居たが又ごろりと横になつた。

夏の眞晝の道には人の氣もなく森閑として、唯太陽がヂリ〳〵と土砂を射て居る。

×

ヂリ〳〵と燒けつく樣な暑さも漸く薄らいで、眞赤な太陽は彼の林の影に靜かに沈まふとして、草や樹や人や總てのものに一日の名殘を告げてゐる。

蚊を追ふ煙は空低く一面に擴つてゐて、嬉々として戯れ遊ぶ子供の聲は、蟬・蜩の聲と相俟つて、あはたゞしい夏の黄昏をいやが上にも賑にする。

月は早や家の頭上に笑を浮べて、前の街燈を薄く照らして居る。

やがて黑いとばりは我が家を見舞ひ、四界も漸く暗くなつた。

三笠參觀の記

平川忠夫

七月二十七日、鎌倉の兄の家を出て、煎りつく樣な暑い夏の道を、とぼとぼと唯一人海岸通へ出た。海岸通りに沿ふて歩いてゐると、時折白雲が太陽をさえぎつて沖から吹く涼風が何となく涼しかつた。然しそれも、つかの間で又灼々たる夏の陽は容赦もなく照りつけた。午前十時半、横須賀行の列車に乘りこんだ。車中僅か二三十分にしてもう横須賀驛についた。左には大小の軍艦數十隻が黑煙朦々として碇泊してゐる。右には水兵がバルーンの練習をしてゐるのを見て、心は何となく緊張した。そして或る心强さが心底に湧いた。直ちに自動車を飛ばして白濱へと向つた。白濱には軍艦三笠が前半は海に後半は陸に永久に保存されてゐる。今日私が態々此の白濱にやつて來たのは年來の願望である此の三笠を見んが爲である。軍艦三笠！　なんと云ふ懷かしい而して忘れがたい名であらう。小學五年生の時初めて日本海々戰史を學んだ爾來、軍艦三笠と云ふ名は一入私の心に深く刻みこまれたのであつた。今日その軍艦を實地に參觀するに當つて心はもう欣喜に滿ちて、矢も楯もたまらなくなつた。今眼前に堂々たる三笠の雄姿をみて、又も日本海々戰史の記憶を辿つた。彼三笠は日本海々戰當時、彼が聯合艦隊の旗艦として先頭に立ち、四十餘箇の巨彈に貫かれながら奮戰復奮戰「皇國の興廢此の一戰にあり各員一層奮勵努力せよ」の千歲不朽の信號を揭げて、敵艦隊を遂に全滅した其の報告が內地に達した時、我が國民は狂喜して手の舞ひ足の踏むところを知らず、咽喉も裂けよと聲の限り彼の功績を謳歌したと云ふ事である。然るに運命の神の惡戯は、啻に人間の上のみではなく、あはれ大正十年の華府會議の結果、無慘や彼は軍縮の犧牲に供せられ、爆沈か、解體か、其の一を免かれざるの悲境に陷り、吾人をして、狡兎死して走狗烹らるの歎を禁ぜしめ得なかつた……が報恩の志深く同情の念篤き我が國民は、どうして之を默視して居らう。果然奮起せる有志者の熱誠に因り「三笠保存會」は速刻にして成つた。そして永久保存されたのである。洵に喜ばしき限りである。今私は艦內一巡して三笠に絡まる涙ぐましい物語の數々を聞いた。中にも、時は明治三十七年二月九日正午の頃、前夜我が驅逐隊の襲擊を受けて狼狽し、旅

順港外雄然一團をなしてゐる敵艦の直前を、三笠先頭となつて十五隻縱陣となり、戰鬪旗を潮風に靡かせつゝ、東より西に通過し機熟せりと見る間も遲く、三笠は前部三十糎砲の試射をなした。之が之旅順口に於ける第一の發砲で、續いて零時九分より右舷の全砲火を敵に浴せ、他の諸艦も之に倣つて旅順口第一次の攻擊が行はれた。之が彼三笠の初陣であつて早くも數箇の巨彈を被むり檣上の戰鬪旗を三度換へた程の手痛い働をなしたのである。爾後同方面に於ける彼は敵に息つく暇も與へず、目覺しい活躍を續け前後八次の攻擊には、いつも先頭にあつて威力を恣にし、敵の賴みきつた名將マカロフの戰死脫出せる敵艦隊の壓迫、さては三回の港口閉塞の援護など晝夜を分たぬ奮鬪は、數へあぐるに遑もない位であつた。第一回第二回と續いて閉塞に從事する事を許された兵士は全艦隊を通じて僅かに二人よりなかつた。而してその一人は實に三笠乘組の二等兵曹林紋平と云ふものであつた。同兵曹は岐阜縣土岐村の生れで、歸里には六十九歲になる老母と脊髓炎に罹り半身不隨になつた益吉と云ふ弟があつたので此の人々を養ふは、同兵曹より外には無かつたのである。併し彼には君を思ひ國を思ふ至誠の血が燃えたつて、身も家も思ふ暇もなく指を切り鮮血を以て閉塞隊員に採用せらるゝの願書を認め、三笠艦長に提出した。其の熱心が徹つて遂に拔擢せられたので固より生還を望まない彼は、鄕里の老母に次のやうな訣別の書を寄せた。

「（前畧）若し戰となつた時は私の俸給全額を母上の許へ送るようと艦長海軍大佐伊地知彥次郎閣下まで願書を差出しておきましたゆゑ母上の許へ私の俸給が皆行きますから其の內拾圓だけは貯金して置いて下さい。その餘は僅ですがどうぞ小使にして下さい。（中畧）新聞で見ると世界のものが皆海戰について注意してゐるさうで一番初の戰は海戰ゆゑ世界の人々が注意するのも無理はありません。こんなわけですから海軍の兵士は命を捨てゝ働かねばなりませんので元より生きて還るといふやうな精神は無く國家の爲に死ぬる決心であります。どうぞ母上樣には御達者で末長く御長命のほど蔭ながら祈つてゐます。益吉樣には御不運にて生れもつかぬ不具の御身となり殘念のことゝ察しますが、どうぞ母樣には心配をかけないやう御成長なされませ。」

淚なしに誰が之を讀み得るであらう！　烈々火の如き忠義の裏に包む優しき心、母を懷ひ弟を憐む其の切々の情を偲ぶとき三笠の艦靈も泣かずには居られなかつたであらう。思へば斯くも健氣な勇士を出したのは同艦の誇とするに足る所で其の保存と共に永久に傳ふべき語種であらねばならぬ。

其の他、東鄕司令長官は震天動地の大海戰が今や開始せられんとする時、大將は旗艦三笠の司令塔に居られたが、其の胸中作戰の計畫が既に成つて、おもむろに艦橋の上を歩いてをられた。その沈著な態度は大戰が將に至らんとするを知らない者のやうであつた。時に加藤參謀長、秋山參謀は大將の危險を憂へて「千金の御身である、かゝる危險を冒せられてはいけません。どうか司令塔におはいり下さい」と云ふ。大將は疎髯を捻りながら莞爾として「好意は謝す然れども予はすでに老人じや。今や餘命を君國に捧げる時機が到來した。卿等こそ年なほ壯である。我が海軍の將來は卿等に待つところが多い。お這込りなさい」幕僚は長官を思ひ、長官は幕僚を思ひ、敵を前にして互に他を氣遣ふ優しい精神、神も照覽ありてか奇蹟を示し後激戰となるや、敵の一彈司令塔の僅の間隙より塔內に、飛込んで爆裂したとの事である。あれやこれや此の軍艦に絡まる哀話を聞く度每に淚の種である。

この三笠は北淸の團匪の亂が起つて、東亞大陸が漸く多事になつて來た明治三十三年の十一月に、彼三笠は英國ヴィツカース社で進水せられ、同三十五年の三月完く工を竣へて五月十八日に橫須賀軍港に着したのである。

彼は其の當時に於ける一等戰艦で長さは四百呎、幅七十六呎二吋、吃水二十七呎二吋、排水量は一萬五千三百六十二噸速力十八哩五である。又塔載兵器の主なるものは、三十糎砲四門、十五糎砲十四門、八糎十八門、機砲三門、水雷發射管四管を有つて居るので、今日から見ると大したものではないが、其の當時にあつては世界有數の堅艦で、洵に皇國海軍の一大勢力であつた。約二時間に亘つて艦內隈なく一巡午後三時半、橫須賀驛へと自動車を飛ばした。夏の太陽はカン〳〵照りつけたが車中凉風を浴びながら兄の家へついたのは四時過であつた。

弟の死

川澄　健一

おゝ思ひ出しても悲しい弟の死。

それは丁度紅葉が赤らむ頃であつた。暑い大阪の或家の一

室でとう〳〵此の世を去り永遠に歸らぬ旅路出たのであつた僅か十一年しか此の世の風に吹かれずに――あゝ――。

盤日葬式は阿部野葬儀所で行はれた。

ほがらかに御經を讀む坊さんの聲は室にみち〳〵て誰も誰も袖をぬらした。弟の爲に弟の同級生一同が先生の引率の下に、來てゐるのを見た時は實に感涙に咽んだ。僕が長男として一番始めに燒香した。張り裂けんばかりの胸を辛棒して弟のみ靈の前に立つた時、僕は泣きたかつた。悲しかつた。そして僕はじつとその煙を見つめた。煙はさながら弟の所へ行くが如くゆらゆらと高く〳〵。

やがて式も濟み、家に歸つた。その夜は外に赤々とついてゐる電燈もぼんやりしてゐた。

夜は實にさびしい晩であつた。そしてあたりは悲哀そのものゝやうなこほろぎの聲でうづめつくされてゐた。

いぢらしいこほろぎの聲は聞げば聞く程淋しかつた。

釣

岡庭　博

午後の日は頭上にかく〳〵と照つて居る。湖水の端で一心に釣糸をたれる。水は透徹つて底まで見える。深さは四尺位そつと降す一匹二匹見る間に集まつて來る。浮きがかすかに動き出した、ぐつと動く。そらの糸は勢よく水面におどつたが目的物はない。又降す。今度は仲々動かぬ。そら竿が動くは白い腹をして砂の上ではねて居る。

「釣れたか」向の方で聲がする。

「うん」振りかへりもせずに答へる。

十人許り熱心に見て居たのが一人へり二人へり今は早二人になつてしまつた。仲々熱心らしい。

「掛つた！」ずつと向で聲がする。陽は最早西の山に近く湖上には歸帆が二つ三つ見える。

聲の主は海岸にをる中學生らしい姿。

波打際へ來て見ると五寸ばかりの「ハス」が釣れて居る。

「此からだ」側目も振らずに竿を動かして居る。

動くに從つて五つの針も蚊の如く動く。ぱつと水が立つ。飛付いた。四寸ばかりのが砂の上にはねて居る。

「釣れた」今度は彼方から、

最早あたりは薄暗くなつて波は段々大きくなる。棧橋には電燈が薄く輝いて居る。

「歸らうか」夕闇を破つて響く。

「待て〳〵、そら」言葉の終らぬ中に三寸許りのを釣上げた仲々上手らしい。足は水中でズボンの下の方は波でぬれて居る。あたりは段々と暗くなつて來る。三人の太公望はあたりが眞暗になつた頃歸途についた。

秋晴の朝

飯村　天祐

ほの白かつた空に太陽が靈仙の山の上に雄大な眞赤な姿を靜かに表はして黄金の征矢を投げ出した。今迄靜に眠つてゐた綠の山々は活々として來た。しつとりとした空氣。冷やかな朝風。その心の爽快さ。

今私の歩んでゐる道ばたの沼は昇り初めてゐる太陽に黄金に輝いてゐるのが、さわ〳〵さわぐ葦の間から見える。

路の兩側には狐の尾をふり立てた樣な名もしらぬ草にたつぷり朝露がふくまれて白く光つてゐる。

その中に所々に群をなして紅の美しい彼岸花が咲いてゐる稻の葉の上に乘つてゐる露が朝風にさわめいては白く黄色く赤く青く或は紫に光つて眞に寶玉の樣だ。パツ！　突然私の瞳に映つたものがある。實にまばゆい　それは山の上のトタン屋根に太陽が輝いて反射してゐるのである。

山のふもとに朝もやがたなびいてゐる。

それをたどつて行くと林のそばに村がある。

土藏の家の横から煙が立つてその朝もやに混じてゐる。百舌鳥が何處かでけたたましくなく。

太陽は靜かに昇る。

ぽつん　ぽつん　と綿を投げた樣な白い雲が動かうともしないでじつとしてゐる。

實に爽快な秋晴の日の朝。

魚屋

先き程來た魚屋が又僕のうちへやつて來た。

「萬衛門さん　何かですか？」

と勝手をしてゐた母が聞くと

「へエ　あの――てぬぐひを忘れて行きましたのでな――もらいによせて頂きました」

「さうですか！　うちにはそんなもの見當りませんでしたが

――……」

さういひながら二人はあたりをさがしてゐたが見當らないらしい。しばらくして

「萬衛門さん　あつたかいな？」

と僕が聞くと

「いや！　ごさんせんわいな――」

といひながら庭で立つたまゝ腰にさげてゐたキセルを出して一二ふく吸つて歸らうとした時、母が

「萬衛門さん　腰にさげてゐなさるのはてぬぐいでおせんか？」

と聞くと　魚屋はふりむいて腰のあたりをさぐつて見た。

「ヘエ　ごさんしたわいな」

「なんやい！　腰にさげてゐて――……」

と僕がいふと、皆んな一よしに笑つた。

「いや　年よりまするとな――」

いひながら、魚屋は兩方に大きな魚ざるをかついで太つた躰をどて〳〵しながら笑聲を後に夕べの空氣に消えていつた

――（了）――

初秋の落葉

夏川省吾

城趾の西の方に太陽が傾いた。時に城の鐘が五ツ打ち專賣局のサイレンもあはたゞしく鳴り初めた。かうした音で一日の勞働を終つて今は樂しい家へ家へと急ぐ人々がある。此の音こそ工場内の人々の最も樂しい音であらう。

涼風が頰を撫でて行く。一歩二歩進むと、草原の中の虫の聲が耳に入る。湖上は波が畝つてをり、落陽は水面を斜に射て〻、金の如く銀の如く輝く樣實に黄金の泉の感じがする。向ふ沖合に汽船が一雙港にいそぐ。黑煙をはいて。近くには帆を半上げて夕日に舷を照らされながら岸へ〳〵と近づく船を見受ける。太陽は水中に深く沈んだ。さうして水面は「るり色」になてしまつた。然し西の方より赤々と後光がさしてゐる。虫の聲も又耳に入る。

草原に虫の鳴く音を聞きそめて
暮れゆく夏を知りにけるかな

ふりかへつて見ると東の空は淡白くなつてゐる。山々は紫色と化してゆく。鳥が三羽彼方の森へ巣を求めにさも羽重たさうに飛んで行く。

三日月が西に傾いて空にひつかかつてゐる樣な物さびしい面影である。雜草がさわ〳〵とざはめく。（湖畔に立ちて）

海に來て

平野寛

私の來て居る處、それは播洲の明石を少し離れた一漁村である。

須磨明石その樣に華やかで無い。然しそれは眞の海氣分を最もよく味ふに足る處である。

水平線上に潮風一ぱい盈んだ白帆、細長い白いかもめ、夏の月の光を受けたまぶしい入道雲、それは海のシンボルであり、海の精である。そしてまた此の一漁村にもそれは月毎に展開されて居る。

私には海と云ふものは、最ものどかな最も優雅なもの〻樣に思へる。病後の保養といへどそれは實ろ別天地に遊ぶといつた方が明瞭かも知れない。

海！　海それは人の心を大きくし高尚ならしむるものである。朝早く床を離れて、海濱の白砂を歩みながら、早朝に出で行く白帆の舟を見やる時のすが〳〵しさ、泳ぎ飽きて燒けた砂にはらばふ時、つく〴〵その美觀を眺めてはたゞ茫然として、身も魂も空を行くばかりの思ひがある。月の夜海邊の月の夜それはまた格別である。

或夜櫓舟にて海上遠く出た。そして日沒月出の美觀を見て誰かと共に此の美を賞したきものとまで思つた。

それは海上一里余りも出た時であつた。日は一日中照しあきて、も早や一日の最後の强い光を放ちつゝだん〳〵水平線上に近づいて行くのであつた。眞紅に燃ゆる日は沈み行く。波光また波光眞紅に光る。飛雲は紅に輝き遠くのはてはローズ色にぼけて、櫓おす舟人の皮膚は紅と相映じて、いやが上に赤銅色に光る。そして萬物皆眞紅。かくて後海の日は靜かに餘光を殘して暮れて行く。

やがて日にかわりて、月の波上に姿を現すやけだか女神の出づるに似たものがある。金波銀波滿月おゝその色何にたとふべき澄んだ鏡の如き月だん〳〵波上に浮ぶ。金波銀波は踊る、美しき女神をむかへて、舷側にたわむるれ波の音、ギー